



主を待て。

詩人は「深い淵から」主を呼び求めると言っています。余裕があれば信仰生活がしっかりできるだろうと言う人もいますが、実際は逆です。余裕がないから神様を呼び求めるのです。そして呼び求める日常が信仰生活なのです。

主を待つことで、信仰を強められましょう。

「私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。」とあります。信仰が熱心であると、自分は分かってきたという気持ちになりやすいものです。そこで詩人はもう一度振り返って、自分のそのような高ぶりに気づいたのでしょうか。

私たちの成長とはその繰り返しかも知れません。何も分からないままでは、成長はありません。しかし分かったと思うと、主の御心はさらに高いところにあるものです。

乳離れしたように少しは成長しながらも、しかし自分はあくまでも幼子であると自覚しながら、理解の面においても、母のような主の慈しみに頼りましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

130 都上りの歌

130:1 主よ。深い淵から、私はあなたを呼び求めます。

130:2 主よ。私の声を聞いてください。私の願いの声に耳を傾けてください。

130:3 主よ。あなたがもし、不義に目を留められるなら、主よ、だれが御前に立ちえましよう。

130:4 しかし、あなたが赦してくださるからこそあなたは人に恐れられます。

130:5 私は主を待ち望みます。私のたましいは、待ち望みます。私は主のみことばを待ちます。

130:6 私のたましいは、夜回りが夜明けを待つのにまさり、まことに、夜回りが夜明けを待つのにまさって、主を待ちます。

130:7 イスラエルよ。主を待て。主には恵みがあり、豊かな贖いがある。

130:8 主は、すべての不義からイスラエルを贖い出される。

131 都上りの歌。ダビデによる

131:1 主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。

131:2 まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のようにより前におります。

131:3 イスラエルよ。今よりとこしえまで

